人の強みを活かす組織と、活かせない組織。何が違うのか？

vol. 3
2026 AUTUMN

Bizrea



元ラグビー日本代表 長江有祐
「自分で考え、動く人をどう育てるか。」

2026 AUTUMN
次の一年を見据える、組織づくり。

人が輝く組織は、強い。


FIND YOUR
PLACE TO
SHINE.
「誰にでも、輝ける場所がある。」



FIND YOUR PLACE TO SHINE.

「誰にでも、輝ける場所がある。」

大切なのは、誰かと同じになることではなく、自分の強みを知り、それを活かせる場所を見つけること。ラグビーには15のポジションがあり、それぞれに違う役割があります。誰かの苦手を、別の誰かの得意で補いながら、一つの目標へ向かっていく。長江有祐さんは、そこにラグビーの魅力があると語ります。



INFORMATION

チーム名	中部大学ラグビー部
法人名	一般社団法人スクラム
代表者	代表理事 長江 有祐
所在地	愛知県春日井市中切町1-5-4
連絡先	y.nagae@kc-warriors.com

HP





人を知れば、会社の未来が見えてくる。

少しずつ秋の気配が感じられ、企業にとっても年末や次の一年を見据え始める季節となりました。いま、企業を取り巻く環境は大きく変化しています。人手不足や採用難、賃上げ、働き方の変化、そして生成AIをはじめとするデジタル技術の進化。そんな時代だからこそ、Bizreaが大切にしているのが、「**人の言葉**」です。Bizreaは、経営者やそこで働く人たちの考え方や想いに光を当てるビジネス誌です。

なぜ、この仕事を始めたのか。
何を大切にし、どんな未来を描いているのか。

会社概要や数字だけでは見えてこない、その会社らしさは、そこにいる人の言葉から見えてきます。そんな新しい発見や出会いにつながることが、Bizreaの役割です。ぜひこの先の記事も、企業紹介としてだけではなく、一人の人生や仕事観に触れるような気持ちでお楽しみください。
今月もBizreaから、新しい「人」と「仕事」との出会いをお届けします。



TABLE OF CONTENTS



06 株式会社Vital core
取締役 野口 貴弘
病院で見た「後悔」を、働く人と企業の未来を支える力に変えるVital coreとは

12 名古屋高校サッカー部
監督 山田 武久
勝利だけを追わず、一人ひとりの成長と未来を育てる名古屋高校サッカー部とは

18 一般社団法人スクラム
代表理事 長江 有祐
ラグビーを通じて、学生の挑戦と未来の選択肢を広げる一般社団法人スクラムとは

24 nobodyknows+
ノリ・ダ・ファンキーシビレサス
「これしかない」に縛られず、音楽と農業、自分の“好き”を歩み続けるノリ・ダ・ファンキーシビレサスとは

30 愛知県議会議員
伊藤 貴治
人に会い、声を聞き、何度でも挑戦できる愛知をつくろうとする伊藤 貴治とは

代表者インタビュー

株式会社Vital core
取締役 野口 貴弘

病院で聞いた「あの時こうしておけば」を、働く人の今へ。



PROFILE

「人と組織の未来を、健康を手段に創る。」を使命に、株式会社Vital coreを設立。作業療法士として医療現場で培った経験を基に、中小企業の採用・定着・生産性向上といった経営課題に対し、健康を経営戦略として活用する伴走支援を行っている。「人とのつながりを創る」を理念に、社員一人ひとりが安心して働き続けられる環境づくりを通じて、企業、その家族、地域まで豊かになる持続可能な社会の実現を目指して活動している。

Interview

Q1 ／今の仕事につながる原点は？

私はずっとサッカーをしてきたのですが、大きなけがをした時に、スポーツができないこと、サッカーができないことのつらさを実感しました。その時に支えてくださったのが、リハビリに関わる方々でした。身体が思うように動かない中で、少しずつできることが増えていく。その過程で自分自身も支えてもらいました。もともと「困っている人の役に立ちたい」「人のために何かできる仕事がしたい」という思いがあったので、その経験をきっかけに作業療法士を目指しました。また、これまで自分自身も本当に多くの方に助けられてきたと感じています。だからこそ今度は、自分が誰かの役に立ったり、人と人をつないだりする側になりたい。その思いは、今の仕事にもつながっています。

> “支えられた経験を、働く人を支える力に”

Q2 ／起業を決意したきっかけは？



10年以上、作業療法士として病院で患者さんと向き合ってきました。その中で強く感じるようになったのが、「医療には限界がある」ということです。患者さんから、「もっとあの時こうしておけばよかった」「まさか自分がこうなるとは思わなかった」といった後悔の言葉を聞くことがありました。働き始めた頃には、自分自身も目の前の患者さんの役にどこまで立てているのか悩んだ経験があります。例えば手のリハビリは、歩行などと比べて改善を実感するまでに時間がかかることがあります。一生懸命取り組んでいても、患者さんが求める状態まで届かないことがある。その時に、自分たちにできることの限界を感じました。だからこそ、病気や不調が起きてからではなく、もっと早い段階から健康について考えるきっかけをつくることが必要なのではないかと思うようになりました。そんな時に、今の事業につながる取り組みを実際に行っている方と出会いました。現場を見て、経営者の方や従業員の方の話を聞く中で、「自分がしたいことは、こういうことなのかもしれない」と感じたんです。病院で培ってきた経験を、病院の中だけではなく、働く人たちの生活や企業の現場にも活かせるのではないか。その気づきが、起業を決意する大きなきっかけになりました。

Q3 子どもの頃はどのような性格でしたか。

学校を一度も休んだことがないくらい、元気な子どもでした。一方で、自分では周りの目を気にする性格だったと思っています。人からどう見られているか、どう思われているかを気にしてしまう部分もありました。人見知りというか、自分から前に出ることが得意なタイプではなかったと思います。今でもそういう部分はあるのですが、周りの方からは「そんな雰囲気には見えない」と言われることもあります。

> 人を想う
> 気持ちが
> すべての原点。

Q4 経営で大切にしていることは？

一番大切にしているのは、「相手のことを一番に考えること」です。経営をしていると、さまざまな判断が必要になります。ただ、その時に「これは本当に相手のためになっているのか」「相手のことを本気で考えられているのか」という部分は、絶対にぶらしたくありません。また、誰と一緒に取り組むか、その人を信じられるかどうかも大切にしています。これまで多くの人に支えていただき、人とのつながりの中で生きてきたからこそ、事業の内容や条件だけではなく、その人がどんな思いで仕事をしているのか、誰を大切にしているのかという部分を見たいと思っています。一緒に取り組ませていただいている友人から、「従業員がいてこそ自分たちがいる」「従業員のために投資をするのは当たり前」という話を聞いたことも、大きな影響を受けた経験の一つです。企業は経営者だけではなく、そこで働く一人ひとりによって成り立っています。その人たちを本気で大切にするという考え方は、自分たちも大事にしていきたいものです。

Q5 「健康を核に未来を作る」とは？

どんな人であっても、仕事をするにも、趣味を楽しむにも、何かに挑戦するにも、健康はとても大切なものだと思っています。健康がなければ、自分がやりたいことを続けたり、人生を楽しんだりすることが難しくなることもあります。だからこそ、自分たち自身も含めて、関わる一人ひとりの健康を大切にしていきたいと考えています。一人ひとりの健康を大切にすることが、その人自身の未来につながる。そして、それが企業の未来や地域の未来、日本、さらには世界の未来にもつながっていく。それが、僕たちが掲げている「健康を核に未来を作る」という考え方です。



Q6 Vital coreのサービス内容は？

企業で働く従業員の方々の身体的・精神的な悩みに対して、健康づくりを一緒に進めていく取り組みを行っています。働いていると、腰痛や肩こり、しびれといった身体の不調や、精神的な負担など、さまざまな悩みが生まれます。僕たちは、働く中で生まれるそうした不調を、広い意味で『職業病』と捉えています。特徴は、僕たちが一方的に「これをやってください」と指導するのではないことです。実際に企業の現場に入り、従業員の方々の身体の状態や仕事内容、働く環境などを確認しながら、その企業や従業員の方に合ったセルフケアプログラムを一緒につくっていきます。健康づくりは、一度取り組めば終わりではありません。僕たちが一方的に何かを伝えるのではなく、従業員の方々と一緒に考え、一緒につくり、一緒に続けていくことを大切にしています。

Q8 作業療法士の経験がどう強みに？

僕たちはリハビリの仕事をしてきた経験があるため、人の動きや姿勢、動作の癖などを分析することを得意としています。例えば腰や肩に痛みがあったとしても、身体だけを見ればいいとは限りません。実際に企業の現場へ行き、従業員の方の身体の状態を見るだけではなく、どのような姿勢で、どのような動きをして仕事をしているのか、どのような環境で働いているのかまで確認します。そして、身体と仕事の動き、環境をつなげて考え、何が原因になっているのか、どうすれば改善につながるのかを考えていきます。作業療法士として患者さんの身体の状態を見て、困りごとについて考え、どうすれば少しでも役に立てるのかを考え続けてきた経験そのものが、Vital coreの技術であり、大きな強みだと思っています。



Q7 一番やりがいを感じる瞬間は？

実際に企業の現場に入って従業員の方と関わっていると、最初は新しい取り組みに抵抗を感じる方もいます。それでも継続して関わっていく中で、「めちゃくちゃ楽になった」「仕事を休まなくてよくなった」「足のしびれが気にならなくなった」と言っていただけることがあります。さらに、「こういうことも新しくやってみたい」と、健康に対する考え方そのものが変わっていくこともあります。もちろん身体の状態が良くなることもうれしいですが、それだけではなく、少しずつ頼っていただけるようになったり、必要としていただけたりすることに大きなやりがいを感じます。自分たちが少しでも力になれていることや、信頼していただけていることを実感できる瞬間が、この仕事をしていて一番うれしいですね。

> 現場に寄り添い、
> 健康を支える。

Q9 どんな企業から相談がありますか？

現在は、製造業や建築業、運送業など、身体を使う仕事が多い企業からご相談いただくことが多いです。現場で働く方の中には、腰痛や肩こり、しびれなど、身体にさまざまな不調を抱えている方がいらっしゃいます。不調があっても、「どこに相談すればいいのか分からない」という方も少なくありません。そうした時に、身体に関する専門家として少しでも頼っていただける存在になることが、自分たちの役割だと考えています。



> “つながる力で、地域の未来へ。”

Q10 どんな企業やパートナーとつながりたいですか？

従業員の方々を大切にしている社長や経営者の方々と、ぜひ一緒に取り組んでいきたいと思っています。従業員のことを本気で考えているからこそ、健康の大切さや、働く環境を整える意味にも共感していただけると思うからです。また、健康という分野はとても広く、自分たちだけですべてを担えるわけではありません。それぞれが自分の得意な領域で質の高いものを提供し、必要な時につながることができれば、企業や従業員の方に対して、より大きな価値を提供できると思っています。自分たちの専門性を活かしながら、人と人、企業と専門家をつなぎ、働く人たちの健康を一緒に支えていける関係をつくっていきたいです。その中で、自分たちが一番提供したいものは、技術や知識だけではなく、相手のことを本気で考える「ハート」だと思っています。

Q11 Vital coreが目指す未来は？

まずは、自分たち自身が企業としてしっかりとした基盤をつくることが必要だと思っています。どれだけ良いサービスを持っていても、自分たちの体制が整っていなければ、十分なものを提供することはできません。今協力してくださっている方々のためにも、まずは結果を出していけるように、自分たちが動き続けていきたいです。3年後には、自分たちなりの形をつくり、経営者の方や従業員の方々から「これは本当にいいよね」と感じていただけるサービスにしていきたいです。自分たちが良さを伝えるだけではなく、実際に関わってくださった方々が良さを感じ、紹介してくださるような存在になることが理想です。そして5年後、10年後には、地域で健康のことといえば、「Vital coreに聞けば分かるよ」と言っていただけるような存在になりたいです。地域に根ざし、一人ひとりを大切にしながら、企業で働く人たちの健康と未来を支えていく。そうした企業を目指していきたいと思っています。

Bizrea

COMPANY OVERVIEW

株式会社Vital core

「医療の現場で見た後悔を、未来を支える力へ」
株式会社Vital coreとは?

株式会社Vital coreは、作業療法士を中心とした医療系国家資格保有者のチームが、企業の現場に直接介入する健康経営支援サービスを展開する企業。アンケートによる労働損失の可視化をはじめ、フィジカルチェックや現場分析、ワークショップなどを実施。社員一人ひとりが自ら健康を維持できるセルフケアプログラムを職場に定着させる支援を行っている。「身体と職場環境」を入口に、生産性向上や離職防止、労災削減といった企業の経営課題の根本的な解決を目指している。



会社名	株式会社Vital core
代表者	代表取締役 山中 信人
本社	〒510-0084 三重県四日市市栄町1－11 くすの木ビル
連絡先	vital.noguchi@gmail.com

CHECK THE DETAILS!

代表者インタビュー

名古屋高校サッカー部
監督 山田 武久

勝ちにこだわる。それでも、軸は成長至上主義。



PROFILE

名古屋高校サッカー部監督を務める山田武久氏。現在は約160名の部員と、総勢20名ほどのスタッフをまとめている。また、サッカー部の金銭面を管理する一般社団法人「SV名古屋」の代表理事も務める。学校では英語科教員として教壇に立つほか、生活指導部長も担当。名古屋高校での勤務は21年目を迎える。

Interview

Q1／サッカー指導を志したきっかけは？

私は昔から英語が得意で、英語とサッカーを小学校からずっと続けてきました。英語とサッカーは、どちらも世界で通用する、ある意味での言語だと思っています。その二つを教えたいと考えた時に、教員という仕事がいいのではないかと思い、この道に進みました。その後、名古屋市立名東高校で永曽哲也監督に出会い、サッカーについていろいろな話をする中で、自分も強いチームをつくりたいと思うようになりました。この出会いは、監督・指導者としての道を歩む大きなきっかけになっています。

> 出会いと経験が、指導の原点をつくる



Q2／大きな転機となった出来事は何ですか。

30歳頃に、公務員を辞めて私立高校へ移ったことです。公立高校と私立高校では、チームづくりの環境が大きく異なります。私立高校には転勤がないため、長い期間をかけて、じっくりとチームづくりやチーム運営に取り組むことができます。また、指導のベースには、名東高校だけでなく、その前に勤務していた名古屋市立中央高校での経験もあります。中央高校は学校に通うことが難しくなった経験を持つ生徒など、さまざまな背景を持つ方が集う学校でもありました。そこで身につけたのは、上から引っ張るのではなく、下から支えていくという考え方です。現在も、どちらかと言えばボトムアップの形で指導に携わっています。

Q3 チームづくりで最も大切にしている考え方を教えてください。

私は「勝利至上主義」ではなく、「成長至上主義」という言葉を掲げています。もちろん、スポーツをやっている以上、勝ちにこだわることは大切です。ただ、それに加えて、一人ひとりが成長していくことを最も大切にしています。昨日よりも今日、今日よりも明日、強くなり、上手くなること。一人ひとりが少しずつ前に進んでいくことを主眼に置いて、日々指導しています。

> “勝利とともに、一人ひとりの成長を。”

Q4 選手一人ひとりと向き合う上で、意識していることは何ですか。

選手は一人ひとり、顔も個性も違います。だからこそ、その選手に合ったアプローチをすることを心がけています。強く言っても受け止められる選手には強く伝えますし、同じ伝え方では難しい選手には、その子に合った伝え方を選びます。全員を同じように扱うのではなく、それぞれの個性を見ながら関わっていくことを大切にしています。

Q5 サッカーだけでなく、選手に身につけてほしいものはありますか。

大切にしているのは、圧倒的なインプット量です。サッカーの知識だけでなく、社会に出た時に通用することや、社会で必要とされる情報を、高校生という吸収力の高い時期にできるだけ多く与えたいと考えています。海外遠征ではタイなどにも行き、経済成長や街の発展を実際に目にします。将来ビジネスをすることになった時に、現地の人との関わり方や、ビジネスパートナーとの向き合い方を考えるきっかけにもなります。
サッカーだけに限らず、できるだけ多くの知識や経験に触れてほしいと思っています。



Q6 名古屋高校サッカー部が目指しているチームを教えてください。

最後まで自分の持っている力をすべて出し切って、サッカーをするチームであってほしいと思っています。そして、勝ちにこだわることです。パワーや声、チーム全体の雰囲気でも相手を圧倒し、できるだけ勝率を上げていく。もちろん、一つひとつのプレーが感動を生むこともありますが、最後は勝ったチームが賞賛されます。だからこそ、チーム全体で勝ちにこだわったサッカーを目指しています。

Q7 選手を育成する上で、特に大切にしていることは何ですか。

「絶対的な個」の育成です。一人ひとりにフォーカスすることを大切にしています。身長や体重、筋肉のつき方も選手によって異なります。そこで、フィジカル測定や血液検査などを行い、できるだけ数値化・見える化するようにしています。その子に何が足りないのかを、栄養面や休養、生活面も含めて考え、一人ひとりにアプローチしていきます。一律の方法で伸ばすのではなく、それぞれの個性に合った方法で、個の育成につなげていきたいと考えています。

Q8 選手の成長を最も実感するのは、どのような瞬間ですか。

在学中よりも、卒業後に再会した時に成長を感じることが多いです。高校を卒業し、卒業生として再び会った時に、以前とは違う表情や考え方を見せてくれることがあります。そうした姿を見ると、教員という仕事は本当に息の長い仕事だと感じます。

> 個を磨き、
> チームを強くする



Q9 進学校でサッカー部を運営する難しさと強みを教えてください。

難しさは、時間にかなり制限があることです。全員が16時まで授業を受け、活動できるのは16時30分から19時30分までです。その中で現在は160人の部員がいるため、1日90分のトレーニングを基本に、90分を2コマ設けたり、朝練を活用したりしながら運動量を確保しています。一方で、選手たちは考える力を持っています。限られた環境の中で、自分に今何が必要なのかを彼ら自身が考えてくれます。90分という限られた時間の中で集中し、パフォーマンスを上げていく力は、名古屋高校の選手たちの強みだと思います。

Q10 OBや地域との関わりで大切にしていることは何ですか。

地域に愛されるチームづくりです。地域のハブになっていくためにも、地域から愛されることは非常に大切だと考えています。そのため、地域でサッカー教室を開催したり、学校近辺に住む高齢者の方々に声をかけ、健康教室を実施したりしています。先日開催したサッカー教室では、現役Jリーガー3人が参加し、200人の小学生がグラウンドに集まってくれました。みんなでサッカーを楽しむ機会をつくれたことは、非常に良かったと思っています。

Q11 選手たちには、サッカーを通じてどのような人生を歩んでほしいですか。

自分らしい生き方をしてほしいと思っています。型にはまった生き方だけでは、今の世の中を生きていくのは難しいと感じています。だからこそ、サッカーを通じて、自分がどのような個性を持っているのか、自分の強み、いわゆるストロングポイントは何なのかを知ってほしいです。それを理解した上で社会に出れば、自分の強みを活かして生きていくことができます。人とは違う、自分らしい生き方を、高校時代や大学時代に考えてほしいと思っています。

> “サッカーを通じて、未来を生きる力を育てる”



Q12 名古屋高校サッカー部の今後の目標と思いを教えてください。

名古屋高校は、文武両道という点で、学力でもサッカーでも日本一を目指している学校です。高校サッカー選手権大会ではベスト8まで進むことができました。これからはベスト4に進出し、国立競技場の舞台に立ち、さらに決勝まで進んで、真の日本一を目指したいと思っています。昨年はサッカー部からJリーガーが1人誕生し、その同級生には京都大学に合格した部員もいます。学業とサッカーの両方で高い目標を持てることは、名古屋高校らしさだと思います。また、これからはAIによって仕事が効率化され、負担やストレスを減らす方向に世の中が進んでいくと思います。だからこそ、ストレスへの抵抗力やレジリエンス、反骨精神といった非認知能力が、より大切になると考えています。そうした力を育てる上で、スポーツは非常に適しています。学力でも日本一を目指し、サッカーでも日本一を目指す。そして、スポーツを通じて精神的にも強い人間を育てていく。そんなチームにしていきたいです。

Bizrea

COMPANY OVERVIEW

名古屋高校サッカー部

「サッカーを通じて、未来を生きる力を育てる」名古屋高校サッカー部とは？

1887年創立のキリスト教主義に基づく男子校。創設者のクライン牧師が、キリスト教と英語教育を主眼に学校を創設した。現在も、文武両道を高い次元で実現することを目指し、日々の教育活動に取り組んでいる。
サッカー部も活発に活動しており、2023年度の全国高校サッカー選手権大会では、初出場ながら全国ベスト8に進出。また、近年は高校卒業後すぐにJリーグへ進んだ選手が2名、大学を経てJリーガーとなった選手が1名おり、それぞれ現在も活躍を続けている。



チーム名	名古屋高校サッカー部
学校名	学校法人名古屋学院　名古屋高等学校
監督	山田 武久
所在地	〒461-8676 名古屋市東区砂田橋2-1-58
連絡先	052-721-5271
創立	1887年7月11日

CHECK THE DETAILS!

代表者インタビュー

一般社団法人スクラム
代表理事 長江 有祐

誰にでも、輝ける場所がある。だから、自分で考え、動く。



PROFILE

元ラグビー日本代表として2012年から2015年まで活躍し、18キャップを記録した長江有祐氏。現在は中部大学ラグビー部監督を務める一方、中部電力ラグビー部では現役選手としてプレーを続けている。また、清泉女子大学の学長特別補佐、名鉄スマイルプラス「SPOCCO」公式アンバサダーとしても活動。さらに、株式会社SBS代表、一般社団法人スクラム代表を務めるなど、スポーツを軸に幅広い分野で活動している。

Interview

Q1 ／ラグビーとの出会いから、プロップへ転向するまでを教えてください。

高校に入った時は、ラグビーをするつもりは全くありませんでした。小学校、中学校とバスケットボールをやっていたので、高校でもバスケットボール部に入るつもりだったんです。ですが、学業のコースの関係もあって、結果的にバスケットボール部には入れませんでした。それでも何か部活動はしたいと思っていたところ、夏休み前にラグビー部と出会いました。「このままだと夏休みが暇になるのが嫌だな」という、本当にそれくらいの感覚で入部したので、ここまでラグビーを続けるとは全く思っていませんでした。入部して数週間後には、練習試合に出ることになりました。僕はルールも全く分かっていなかったのですが、「ボールを持ったら、まっすぐ突っ込めばいいから」と言われて試合に出ました。ところが、最初のプレーで思い切りボールを落としてしまったんです。その時に「中学生にビビっているのか」と怒られました。そこで、自分の中にスイッチが入ったのだと思います。「ビビっていては駄目だ」「やらされていては駄目なんだ」と気づきました。もともと負けず嫌いだったこともあり、「中学生に負けていられない」と本気で取り組むようになりました。もともとはバックスでプレーしていて、ボールを持ってチームを前に進めることや、ディフェンスを頑張っていました。ただ、足の速い相手を止めなければならない一方で、僕自身はそれほど俊敏なタイプではありませんでした。当時の体重は60キロ台で、今とは全く違う体格でした。その後、フォワード、そしてプロップへ転向しました。プロップはスクラムを組む最前線で仲間を支える役割です。自分が下がれば、チーム全体も下がってしまう。体を張り続け、仲間のためにどれだけ仕事量を増やせるかが問われます。結果的には、自分の性格にも合っていたのだと思います。転向を勧めてくださったコーチには、今でも感謝しています。その転向がなければ、日本代表にもなっていなかったと思います。



> 偶然の出会いが、人生の軸に。

Q2 ／原点となった恩師や、今も残っている言葉とは？

恩師という意味では、高校で僕をラグビーへ導いてくださった宮地先生です。バスケットボール部の見学に行き、「入れないんだ」と思いながら体育館を出た時、たまたま宮地先生と出会い、そのままラグビー部へ連れていかれました。宮地先生自身にはラグビー経験がありませんでしたが、僕たちが強くなれるように、さまざまな地域へ連れていってくださいました。レベルの高い高校と対戦する機会をつくっていただき、その中で関西の大学の監督の目に留まり、京都産業大学へ進学することができました。当時の僕たちの高校は、全国的に名前を知られている学校ではありませんでした。だからこそ、いろいろな場所で挑戦させてもらったことが、新しいご縁につながったのだと思います。もう一つ、今でも残っているのは、父親から言われた「途中でやめるなよ」という言葉です。高校ではバスケットボール部に入るつもりだったので、新しいバスケットシューズも買ってもらっていました。それなのに突然「ラグビー部に入ろうと思う」と伝えたので、両親は驚いたと思います。父親は「お前にはラグビーが合っていると思う。やってみたらいいんじゃないか。でも、途中でやめるなよ」と言いました。おそらく高校3年間は続けろという意味だったと思いますが、その言葉がずっと残り、今でもラグビーに関わっています。「中途半端なところではやめられない」「最後までやり切りたい」という思いは、そこから来ているのかもしれません。

Q3 日本代表を目指す中で、身長という壁をどのように乗り越えたのでしょうか。

大学時代に、21歳以下や23歳以下の日本代表でプレーする機会をいただきました。高校日本代表には全く関わっていませんでしたが、大学で頑張っているうちに声をかけていただきました。ただ、その時は代表に選ばれたことで、どこか満足してしまっている自分もいました。ところが、23歳以下の日本代表で一緒にプレーしていた同世代の選手たちが、社会人1年目から日本代表に呼ばれ始めました。それを目の当たりにして、「自分も日本代表を目指したい」と本気で思うようになりました。それでも、すぐに選んでもらえたわけではありません。当時は、身長が低いことを理由に、なかなか代表に選ばれませんでした。身長は努力しても伸ばせないので、「自分には無理なのかもしれない」と諦めかけた時期もありました。それでも日本代表になりたいという思いは消えず、所属チームで努力を続けました。そしてシーズンが終わった頃、所属チームの監督から「長さん、日本代表に選ばれたよ。おめでとう」と伝えられました。その瞬間は、恥ずかしさもなく泣きました。初キャップはカザフスタンとの試合でした。日本代表のジャージを着て、日の丸と桜のマークを背負い、試合前に国歌を歌った時、「本当にここまで来たんだ」と感じました。最高の景色でした。登録上は171cmでしたが、実際は169cmです。エディー・ジョーンズさんからは、「その身長だからこそできることもあるだろう」と言われました。そして、「日本人の成人男性の平均的な身長でも、日本代表として世界と戦える、憧れられる存在になりなさい」と言っていただきました。それまで身長の低さを理由に選ばれなかった僕にとって、その言葉は本当にうれしいものでした。そこからは、「低さを強みに変える」と決めました。世界の選手が嫌がるようなスクラムを組むことにもこだわり、「チームのために負けない」「日本のために負けない」という思いで戦いました。さらに、世界の選手より身体が小さいからこそ、誰よりも動き、誰よりも働き続ける。それを自分の役割として決め、通常の練習だけでなく個人練習にも徹底して取り組みました。



> 身長の低さを強みに、壁を越える

Q4 けがや大きな挫折を、どのように乗り越えてきましたか。

まず、その状況を受け入れることです。身長が低いという事実も、けがをしたという状況も、変えられない以上、まず受け入れなければ乗り越えることはできないと思っています。身長を伸ばせないのであれば、それを受け入れたうえで、「では、ほかに勝てるところはないか」と考えるしかありません。僕は昔から、疑問を持ち、自分なりに仮説を立てて行動することが好きでした。高校生の頃から、自分でトレーニングメニューを考えていました。けがをした時も、「これには何か意味があるのではないか」「自分のケアが十分ではなかったのではないか」と考えます。そして、「こうすれば良くなるのではないか」「こうすれば壁を越えられるのではないか」と仮説を立て、全力で取り組んできました。日本代表のキャリアにおいても、大きな挫折がありました。2012年から2015年の4年間、イングランドで開催されるワールドカップのために全てを捧げてきたのに、ワールドカップ直前合宿でけがをし、チームを離脱しました。バックアップメンバーとして登録されましたが、出場機会はありませんでした。さらに、無理をして復帰しようとしたことで大きなけがにつながり、約1年半、競技から離れることになりました。とても辛い経験で、僕の中では人生のどん底にいる気分でした。僕は2015年のワールドカップに出場したら、日本代表もプロのキャリアも終えて、中学生の頃からの夢である学校の先生になるつもりでした。ただ、自分の望んだ結果や「やりきった」という達成感を得られなかったことで、「まだいろんな形で日本ラグビー界に貢献したい」という気持ちが生まれてきました。大きなけがと悔しい経験があったからこそ、今もラグビーに関わり、さまざまな活動を続けられているのだと思います。挫折ではありましたが、自分の人生にとって大きな転機になりました。



Q5 現役中から起業や投資を始めた理由を教えてください。

一番は、シンプルに「やりたかったから」です。ラグビー選手としてキャリアを重ねる中で、日本ラグビー界や、日本の教育、部活動の環境に対する課題が見えるようになりました。「ここは矛盾しているのではないか」「もう少し違う方法があるのではないか」と、自分なりに考えることが増えていったんです。引退してから始めようと思っても、その時に同じ気持ちを持っているかは分かりません。自分の中では35歳くらいで引退することを何となく考えていましたが、そこから動き始めるのでは遅いと思いました。そのため、気づいた時から今できることを始めようと考え、プロ契約で現役を続けながら会社を設立し、さまざまな活動を始めました。自分が実現したい世界について周囲に話すと、最初は「そんなことは無理だ」「前例がない」と言われ続けました。ラグビー以上に挫折を感じたかもしれません。それでも僕は、「前例がないからこそ、やるのではないか」と思っていました。自分が気づいた以上、これは自分の使命なのだと考えて動いていたところ、「面白い。一緒にやろう」と応援してくださる方と出会い、少しずつ道が開けていきました。僕にとっての投資も、お金を増やすためというより、「応援」に近いものです。僕自身、先輩や周囲の方々に支えていただきました。その中で、「次は、長江が夢を追いかける人を応援できるようになりなさい。それが良い循環を生む」と教えていただきました。だから、自分も夢を追う人を応援できる存在になりたいと思っています。明確な理念があり、本当に世の中を良くしたいという思いがあるものには、できる限り力を貸したい。それが、現在の起業や投資という形につながっています。

> 笑顔をつなぎ、
> 未来をつくる

Q6 長江さんが考える、ラグビーの一番の魅力は何ですか。

ラグビーは、社会の構図とよく似ていると思っています。会社の中には複数の部署があり、それぞれに得意なことや苦手なことを持った人がいます。それでも、会社や各部署の共通の目標に向かってそれぞれが自分の役割を果たしながら挑戦していきます。ラグビーも同じです。15のポジションがあり、走ることが得意な人もいれば、力を生かすことが得意な人もいます。僕のように、パワーを使うプレーは好きでも、走ることやスピードは得意ではない選手もいます。だからこそラグビーでは、誰かの苦手を、別の誰かの得意で補いながら、一つの目標へ向かっていきます。そして試合の中では、一人ひとりが自分で考え、判断し、行動することも求められます。さまざまな意見が飛び交う中で、最終的には司令塔が判断する場面もありますが、実際にプレーする一人ひとりも、その瞬間ごとに判断しなければなりません。誰かが取った行動に対して、『それは違う』と否定している時間はありません。その行動を正解にするために、仲間全員が考え、動き、サポートする。すべては、勝利というチームの共通の目標に向かうためです。これは社会でも同じだと思っています。それぞれが自分の得意を生かしながら、周囲と補い合い、部署や会社の目標に貢献できる組織は強いと思います。一方で、監督から与えられたことしかできないチームは、僕の中では強いチームではありません。だから、中部大学ラグビー部でも、指導者の言いなりになるのではなく、自分で考え、判断し、行動できる選手を育てたいと思っています。誰にでも、自分が輝ける場所がある。それぞれが自分の強みを生かし、仲間と補い合いながら、一つの目標へ向かっていける。それが、僕の考えるラグビーの大きな魅力です。

Q7 選手やチームと向き合う上で大切にしていることは何ですか。

まず、スポーツを楽しんでほしいと思っています。多くの選手は、「楽しそう」「自分もやってみたい」という気持ちでスポーツを始めたはずです。でも、いつの間にか勝つことだけが目的になったり、指導者の言いなりになったりすることがあります。もちろん勝つことは大切です。ただ、楽しむことは「楽をすること」ではありません。勝つために努力することも、自分で考えることも含めて楽しむということです。「自分はどんな選手になりたいのか」「どういうプレーがしたいのか」を考え、そのために必要な練習を自分で選ぶ。伸びる選手には、自分で考えて行動できるという共通点があります。技術以上に大切なのは、そうしたマインドセットだと思っています。同時に、一人ひとりの人生の豊かさも大切にしています。大学は教育の場なので、勝つために学生の生活をすべて管理することが本当に正しいのかと考えています。中部大学ラグビー部では、ゴールデンウイークやテスト期間、お盆などに長期のオフを設定し、そこへ向かって集中して取り組みます。休みがあれば旅行へ行ったり、新しい経験をしたりできます。ラグビー以外にも楽しみを持つことで、人生は豊かになります。心や人生が豊かだからこそ、ラグビーにも集中できると思っています。また、監督としては、選手一人ひとりとのコミュニケーションも大切にしています。全員と常に話すことは難しいですが、表情や様子を見ながら、その選手の状態を感じ取るようにしています。日本代表やプロ選手だった頃の自分を押しつけるのではなく、「この選手が成長して笑顔になるために、今どんな言葉を伝えるべきか」と考える。僕自身、学生より上の立場にいるという感覚はありません。大学の部活動は学生のものです。学生自身が考え、行動し、チームをつくることに意味があると思っています。

Q8 大切にしている信念と、中部大学ラグビー部で実現したい未来を教えてください。

現役時代から一貫して大切にしているのは、関わるすべての人に笑顔になってもらうことです。僕は、自分のためだけに頑張るというより、仲間のため、人のためという時に力を出せるタイプです。現役時代も、自分が活躍すること以上に、チームで勝ちたい、仲間に喜んでほしいという思いがありました。今の活動も、その延長にあります。また、周囲の人に笑顔になってもらうためには、まず自分自身が楽しむことも大切だと思っています。監督が楽しんでいれば、学生にもその空気は伝わる。だから、指導する時も、自分が楽しむ姿を見せるようにしています。中部大学ラグビー部については、「春日井をラグビーの街にしたい」と掲げるより、まずは中部大学ラグビー部そのものを最高の環境にしていくことが先だと考えています。そこに人や企業が集まり、「一緒に何かやりたい」と思ってもらえるようになれば、少しずつ地域とのつながりも広がっていきます。最終的に「中部大学が春日井にあって良かった」「ラグビー部があるから、このつながりが生まれた」と思ってもらえたらうれしいです。10年後には、高校生から「このラグビー部に入りたい」、企業の方から「応援したい」と自然に思ってもらえるような環境にしたいです。企業と学生が交流することで、「この会社で働いてみたい」と思う学生が出てくるかもしれません。企業見学やインターンシップなどにつながれば、学生一人ひとりの将来の選択肢も広がります。プロを目指す選手もいれば、社会人リーグや教員を目指す学生もいます。進む道はそれぞれ違うからこそ、ラグビーだけでなく、その先の未来まで支えられるチームにしたいと思っています。年間を通してしっかりオフを取り、企業や地域とも交流しながら、それでも勝つ。「この環境で優勝できたら、ワクワクしないか」と学生たちにも話しています。自分で考え、行動し、それぞれが人生を豊かにしながら、チームとして勝利を目指す。そんなチームのあり方を追求していきたいです。

Q9 最後に、これからラグビーに取り組む選手へメッセージをお願いします。

まずは、ラグビーを楽しんでほしいです。そのうえで、自分で考え、行動してほしいと思います。言われたことをそのまま行うのではなく、時には常識を疑い、「もっと良くするにはどうすればいいのか」と仮説を立てて、自分から試してみてください。自分で考えて行動する選手は、ラグビー選手として成長するだけではありません。ラグビーのキャリアが終わった後も、社会の中で活躍できる人になると思います。ラグビーには、誰にでも輝ける場所があります。それぞれの得意を生かし、仲間の苦手を補いながら、一つの目標へ向かっていけるスポーツです。楽しむこと、努力すること、自分で考えること。そのすべてを大切にしながら、自分らしいラグビー人生を歩んでほしいと思っています。



Bizrea

COMPANY OVERVIEW

一般社団法人スクラム

「低さを強みに変えた経験を、誰かの挑戦を支える力へ。」
一般社団法人スクラムとは？

一般社団法人スクラムは、中部大学ラグビー部タイガースの環境をより良くしていくことを目的に設立された団体。地域や企業とラグビー部員をつなぎ、さまざまな活動を通じて、学生たちの未来につながる教育環境づくりに取り組んでいる。目指すのは、従来の枠にとらわれない、どこにもないワクワクする部活動の実現。
学生たちが応援企業を知り、企業の人々と交流することで、新たな興味や将来の選択肢につなげていくことも大きな役割の一つ。ラグビー部の部員たちは、地域や企業からの応援を力に変え、東海学生リーグ優勝と全国大学選手権出場を目指して活動を続けている。



チーム名	中部大学ラグビー部
法人名	一般社団法人スクラム
代表者	代表理事 長江 有祐
所在地	愛知県春日井市中切町1-5-4
連絡先	y.nagae@kc-warriors.com

CHECK THE DETAILS!

代表者インタビュー

nobodyknows+
ノリ・ダ・ファンキーシビレサス

「これしかない」と思わずに、ここまで来た。



PROFILE

1980年8月20日、愛知県生まれ。nobodyknows+のMCとして活動し、2004年にはアルバム『Do You Know？』でオリコン1位を獲得。音楽活動と並行して、愛知県春日井市で農業にも取り組み、これまで培ってきた経験とノウハウを活かして「noridaGARDEN&co.」を経営している。現在は、農業を通じて人や地域、企業をつなぐ新たな取り組みにも力を注いでいる。

Interview

Q1 音楽を始めたきっかけを教えてください。

きっかけは、高校の同級生です。ヒップホップのような音楽を好きになったのは中学生の頃でした。ただ、30年ほど前のことなので、周りには同じような音楽を聴いている人がほとんどいなかったんです。中学校では、共通の趣味を持つ友達にはなかなか出会えませんでした。それが高校に入ってから、同じように音楽が好きな友達ができて、「せっかくだから、何かやろうか」という話になり、ラップを始めました。それが音楽を始めたきっかけですね。ただ、不思議なもので、「この道で生きていこう」と決意した瞬間は、今もないんです。「これで食べていこう」と思ったことも一度もありません。有名になることや、音楽を職業にすることを目標に始めたわけでもなかったんです。今でも音楽は、僕にとって趣味の延長線上にあるものなのかもしれません。

> 「好き」から始まった音楽



Q2 nobodyknows+に参加した頃、どのような未来を思い描いていましたか。

僕は、「nobodyknows+」というものがすでにあった状態で、後から入ったメンバーなんです。ですから、参加した当時に思い描いていた未来というものも、特になかったですね。売れることや、音楽でご飯を食べること、音楽を職業にすることも考えていませんでした。未来について、あまり考えたことがなかったのかもしれません。その都度、その都度、楽しくやれればいい。そんな子どものような感覚のまま活動してきたところがあります。今でも、昔から音楽に関しては「なるようになる」と思いながらやっています。

Q3 ヒットによって、どんな変化がありましたか。

あまり変わっていないのかもしれません。幸い、僕はずっと名古屋にいました。東京へ移ることもなく、周りの環境も、自分たちがやることも大きく変わらなかったので、それが良かったのではないかと思います。今振り返ると、ありがたかったと思うことはたくさんあります。ただ、当時は本当に何も思っていなかった気がします。どこか他人事のように感じていましたし、「自分がやった」という感覚もありませんでした。そのため、ヒットによって何かが大きく変わったという実感も、あまりなかったんです。ただ、今振り返ると、傲慢にはなっていたと思います。それらしい下積みを経験したわけでもなく、特別な努力をしたという意識もないまま、そのような状況になりました。なので、何でも自分の思い通りになるくらいに思っていたのかもしれません。

Q5 長く音楽を続けてこられた理由は何ですか。

辞めるきっかけがないのが大きいですね。音楽を辞めようと思ったこともありません。音楽は、自分の中心にあるものだと思っています。表に出て活動しているかどうかや、それがお金につながっているかどうかは関係なく、何かしらの形で、これからも関わっていくのだと思います。過去には、辞めるタイミングもあったのかもしれません。「ここで辞めておけば一番きれいだった」という時期があった可能性もあります。ただ、それも何となく過ぎてしまって、気づいたら「もう辞める理由がなくなった」という状態になっていました。今もライブの仕事をいただいていますし、「辞める理由がないな」と思いながら続けています。むしろ最近は、若い頃よりも仕事としての感覚が出てきました。ライブでも、「ちゃんと仕事をして帰ろう」と思います。若い頃とは、音楽との向き合い方も少し変わってきたのだと思います。

> 「1年の休みが、農業との出会いへ」

Q4 活動を離れた1年間と、農業との出会いについて教えてください。

セカンドアルバムを出した後、1年間ほど休みをもらった時期がありました。「1年間、何もしなくていい」と言われて、急に時間ができたんです。その時間が、自分について考える時期になりました。そして、ちょうどそのタイミングで農業に出会いました。僕は趣味で音楽を始めて、それが気づけば大きな活動になっていました。もちろん、その都度、自分の意思で選んではきました。ただ、「本当にこれがやりたくて、今こうなっているのだろうか」ということが、よく分からなくなってしまったんです。音楽でご飯を食べるという明確な目標を持ち、そこを目指して進んできたわけではないので、自分がどこへ向かっているのか分からなくなったことは、結構苦しかったのかもしれません。そんな時に農業に出会って、自分が食べるものについて、自分では責任を持てていないことに気づきました。「そういうことを自分でやってみたい」と思うようになり、そこから農業に深く入り込んでいきました。音楽とは別の新しい目標を見つけたというより、目標らしい目標を、そこで初めて見つけた感覚なのかもしれません。「農業でご飯を食べたい」と思うようになったことは、自分にとって大きかったですね。



Q6 音楽活動の中で、大切にしていることは何ですか。

大切にすることは、少しずつ変わってきている気がします。今の時点で意識しているのは、自分が作ったものが、曲やグループの全体像にきちんと合っているかどうかです。全体のことを考えるリーダーがいるので、そこに合わせながら、バランスを取ろうとしているのかもしれません。ただ、そういう時期を経て、最近は結局、あまり何も考えていないのかもしれません。とりあえず書く。とりあえず作る。そして、全体に合っていればいい。そのような感覚になってきています。考えすぎても、あまり良いものはできない気がするんです。nobodyknows+らしさという意味では、メンバー全員が、好きなものも向いている方向も違うところではないでしょうか。同じものを好きな人が、誰もいないんです。そして僕自身としては、昔から「面白さ」を大切にしています。売れること以上に、面白いかどうか。それは今も変わっていないと思います。

Q8 普段のノリさんについて、また最近印象に残った出来事を教えてください。

普段の自分がどのような人なのかは、あまり考えたことがありません。それは、周りの人が決めてくれればいいと思っています。最近うれしかった出来事でいうと、6年ほど続けているプロレスのトークイベントがあります。前回、初めて「みんなで妄想しよう」というような企画をやったんです。普通は、お客さんからお金をいただいてやるような内容ではないと思います。会場のライブハウスのオーナーにも、「何をやっているんですか。人からお金を取って」と呆れられました。それくらい、くだらない内容だったのだと思います。ただ、久しぶりにイチかバチかで考えた企画が、予想以上に盛り上がったんです。成立したのは、お客さんのおかげです。皆さんが温かく、僕たちに対して好意的に受け止めてくれたからこそ、できたことだと思います。今年は神取忍さんをゲストに呼ぶこともできました。それは本当にうれしかったですし、一段ステージが上がったような感覚がありました。



Q7 ライブで大切にしていることは何ですか。

僕がライブで一番大切にしているのは、お客さんに対して何かを伝えようとすることよりも、「このメンバーをどう困らせようか」「どうやって笑わせようか」と考えることかもしれません。僕たち自身が楽しんでいる姿を見て、お客さんにも楽しんでもらえたらいいと思っています。もちろん、仕事としてステージに立っています。ただ、ライブですから、その場所でしか起きないことを起こしたいと思うんです。台本があるわけではありません。その瞬間に生まれた出来事を、来てくれた人たちと共有できる。それが、ライブの醍醐味だと思っています。そういうところを楽しんでもらえたらうれしいですね。

Q9 落ち込んだ時の向き合い方と、過去の自分に伝えたいことを教えてください。

ある程度までは考えます。ただ、そこから先は考えないようにします。落ち込むということは、何か失敗したり、良くないことをしたりしたのだと思います。でも、次から同じことをしなければいい。やってしまった時間は戻ってきません。そこは仕方がないので、蓋をします。そして、次に楽しいことを考えるようにしています。昔の自分に声をかけるなら、「ちゃんと社会を見なさい」と言いたいですね。あとは、「お金の管理は、しっかりしなさい」と。それと、「もう少し社会と接点を持った方がいいよ」とも言うと思います。

Q10 大切な人と、名古屋への思いを教えてください。

感謝している人は、たくさんいます。いろいろな人に、感謝してもしきれません。現在の自分にとって特に大きいのは、グループのリーダーと妻ですね。リーダーは、今の僕を導いてくれている部分があります。これから自分がどうなっていくのかというところでも、助けてもらっています。妻は、僕の無茶苦茶な考え方を矯正して、まともにしてくれた人です。それは今も変わりません。二人に共通して言えるのは、僕に社会性を持たせてくれたということです。これから生きていく上で大切なものを、きちんと授けてくれた。本当にありがたいと思っています。そして、名古屋も僕にとって、とても大切な場所です。だからといって、ほかの地域と比べて、どこが優れている、どこが劣っているという考え方はしていません。ただ、これまで名古屋を出たことがないので、ほかの土地で暮らすことがあまりイメージできないんです。名古屋は、本当に使い勝手が良く、何でもそろっている街だと思います。

Q12 最後に、若い世代や読者へ伝えたいことをお願いします。

僕の場合は、結構珍しいケースだと思うので、すべての人に当てはまるかどうかは分かりません。僕自身、有名になりたい、音楽でご飯を食べたいと思って始めたわけではありません。そのため、そこを目指している人たちに、どこまで参考になるかは分かりません。ただ、今は、誰よりもそれが好きだと思い込んで取り組むことが大事なのかなと思います。その時に、「これしかない」ではなく、「これが一番好き」と考えることです。「これしかない」と思ってしまうと、苦しくなる気がします。逃げ場がなくなって、きつくなってしまう。でも、「これが一番好き」なのであれば、2番目に好きなものがあってもいいんです。逃げ場は、常にあっていいと思います。逃げてもいい。「これしかない」ということは、世の中にはないと思うんです。「これしかないから続けた」のではなく、「これが一番好きだったから、こうなりました」と言える形が、一番いい。僕は、そう思います。そんな気持ちで、取り組んでもらえたらいいと思います。

> 人と街に支えられ、次の挑戦へ

Q11 これから挑戦したいことと、10年後に思い描いている姿を教えてください。

これから挑戦したいことは、やはり農業です。農業に関わることで、ようやく、まともな社会人として人と対等に向き合える機会をいただいたような気がしています。社会の中で、しっかりと泳いでいけるようになりたいです。僕の場合、それが農業だったということなのですが、農業を通して、何かをきちんと残せるようなことをやりたいと思っています。それが今、一番の楽しみであり、挑戦ですね。10年後のことは、正直分かりません。ただ、10年後に「久しぶりに新曲が出る」となった時、「あいつら、まだやっていたんだ」と思われるような活動ができていたらいいですね。あとは、夢を言うのは自由ですから、10年後には農業がかなりうまくいっていて、大成功していると思います。具体的に、どのように成功しているのかは今はまだ分かりません。ただ、とにかく農業で成功しているでしょう。



Bizrea

COMPANY OVERVIEW

nobodyknows+

「名古屋から、世代を超えて音楽を届け続ける。」音楽アーティストnobodyknows+とは？

名古屋を拠点に活動する4MC＋1DJのHip Hopグループ・nobodyknows+。2004年、1stアルバム『Do You Know?』がオリコンチャート2週連続1位、80万枚を超える大ヒットを記録。代表曲「ココロオドル」でNHK紅白歌合戦にも出場した。『NARUTO-ナルト- 疾風伝』主題歌「Hero’s Come Back!!」など数々の楽曲を発表し、地元・東海エリアの音楽文化活性にも尽力。「あいち音楽大使」も務める。2022年に「THE FIRST TAKE」で披露した「ココロオドル」は7,000万回再生を突破。現在も世代を超えて支持を集め続けている。



グループ名	nobodyknows+
メンバー	Crystal Boy、ヤス一番？、ノリノリで歌う坂梨、ノリ・ダ・ファンキーシビレサス、DJ MITSU
会社名	株式会社Sigma Sounds Studio
結成	1999年

CHECK THE DETAILS!

代表者インタビュー

愛知県議会議員
伊藤　貴治

何度でも挑戦できる愛知へ
20歳から変わらない、政治の原点。



PROFILE

1984年12月8日生まれ、春日井市出身。2023年、愛知県議会議員に初当選し、現在は経済労働委員会、アジアアジアパラ競技会特別委員会に所属している。原点にあるのは「人に会うこと」。声に耳を傾け、想いを受け止め、寄り添うことを大切にしてきた。問い続けているのは「正義とは何か」。正義は人の数だけあり、それぞれの大切なものを尊重することがまちづくりの基盤になると考えている。夢のバトンを子どもたちへつなぎ、みんなの大切が詰まったまちをつくることを使命として歩みを進めている。

Interview

Q1 政治家を目指すようになった原点を教えてください。

政治を意識し始めたのは、20歳の成人式の日でした。当時、僕は群馬県高崎市の大学に通っていて、成人式のために地元へ帰ってきました。久しぶりに仲間や地域のおじさん、おばさんと会い、「成人おめでとう」と声をかけてもらう中で、改めて「やっぱり、この町はいいな」と感じたんです。ところが、大学卒業後の進路について仲間と話していると、みんなが「東京へ行く」「大阪へ行く」と、地元を離れる話をしていました。僕は当然のように、いつもの仲間たちと、この町で何かを始めるのだと思っていました。学生時代から僕たちは、「面白いものがなければ、自分たちでつくればいい」と、洋服のブランドをつくったり、イベントを開いたりしていたからです。そんな仲間たちが「この町には何もないから外へ出る」と言ったことが、すごく残念で、悔しかった。「なければ、自分たちでつくればいいと言っていたじゃないか」と思いました。それなら、自分がこの町を、仲間たちが帰ってきたいと思える場所にしたい。そこから、ぼんやりと政治を志すようになりました。大学時代を過ごした高崎市の環境も、大きく影響しています。高崎は、福田赳夫さん、小渕恵三さん、中曽根康弘さんという歴代の総理大臣を輩出した地域です。政治家が地域の人たちと一緒に活動し、国政報告をしたり、将来の夢を語ったりする姿を見る機会がありました。地域の人たちも選挙になれば一生懸命応援する。政治家も地域へ足を運び、人と関わりながら活動する。その姿を見て、政治とは国会や行政の中だけにあるものではなく、地域や一人ひとりの暮らしにつながっているものなのだと感じました。学生時代から持っていた「なければ自分たちでつくる」という考え方は、今も変わっていません。誰かがつくってくれるのを待つのではなく、「自分たちでやろう」と動き始める。その感覚が、今の活動にもずっとつながっています。



> 地元への想いを胸に、政治の道を歩む

Q2 秘書時代を経て、自ら選挙に挑戦すると決めたのはなぜですか。

僕は、伊藤かつんど愛知県議会議員、酒井やすゆき参議院議員のもとで秘書を務めてきました。秘書として仕事をする中で、本当に多くの方と出会い、それぞれが地域に抱いている想いに触れてきました。一生懸命仕事をすればするほど、「この人たちの想いを何とか形にしたい」と思うようになり、そのうち、自分自身もその想いの一部になっていったのだと思います。地域の歴史や文化、さまざまな会や団体の想い。とにかく、自分にできることをすべてやろうと思って動いていました。そうして活動を続けるうちに、「応援してやる」と言ってくださる方が少しずつ増えていきました。もちろん反対する方もいました。それでも、自分を信じて応援してくださる人が増えるほど、「この人たちを裏切ってはいけない。もっと挑戦したい」という気持ちが強くなっていきました。家族からは、ものすごく反対されました。特に妻と母親からは強く反対されましたね。ただ、僕は20歳の成人式の頃から、「こうなりたい」ということをずっと言い続けていました。大学を卒業して一般企業へ就職するのではなく、県議会議員の秘書として政治を学び続けてきた。そうした行動を見て、家族も少しずつ僕の本気を感じてくれたのだと思います。それでも、「なぜ、あなたがやらなければいけないのか」と何度も聞かれました。僕にとっては、自分が住む町であり、好きな人や家族、子どもたちが暮らす町です。だからこそ、自分の手で少しでも良くしたい。政治は単なる仕事ではなく、取り組んだことが自分たちの暮らしに直接返ってくる仕事だと思っています。他人のせいにして迎える明日も、自分たち自身の明日です。他人のせいにして生きるのは嫌だ。だから、自分が変えたい。自分がやりたい。最後は半ば強引なところもあったと思いますが、その覚悟で選挙へ挑戦しました。

Q3 政治を志す中で最も苦しかった時期と、それを支えたものを教えてください。

一番苦しかったのは、県議会議員の秘書をしていた時期です。当時は十分な給料をもらえる状況ではなく、昼間は秘書として働き、夜は飲食店でアルバイトをし、朝は新聞配達もしていました。大学を卒業した周りの仲間たちは会社員として働き始め、給料をもらい、結婚する人も出てきた。一方で、自分はまだ勉強の身でした。自分では、この道を進むために必要な時間だと割り切っていましたが、周りと比べて苦しくなることはありました。飲食店で働いている時に、お客様から「大学を卒業して何をしているの」と聞かれることもありました。「政治の道へ進みたくて勉強しています」と答えると、「頑張ってね」と応援してくださる方もいましたが、「お前には無理だろう」と笑われることもありました。自分が信じて進んでいる道を、周りから否定されたり、笑われたりするのは、やはり苦しかったですね。そんな時に出会ったのが、「想念実現」という言葉です。飲食店で働いていた時、ある方に自分の夢を話しました。すると、その方が「想念実現」と一言、僕に伝えてくれたんです。「想い、念じ続ければ実現する。自分の心を燃やしながら頑張りなさい」と励ましていただきました。僕はその言葉に、本当に助けられました。くじけそうになった時も、この言葉を思い出して頑張ることができました。今でも大切にしていて、名刺にも入れています。その方は後に亡くなられたのですが、偶然その娘さんにお会いする機会がありました。市議会議員になった僕の名刺をお渡しすると、「これは、あの時父が言った言葉ですね」と気づいてくださったんです。「お父さんからいただいた言葉で、今も僕の心の支えです」と伝えると、とても喜んでくださいました。座右の銘というのは、無理に考えてつくるものではなく、自分の実体験の中で出会うものなのだと思います。



> 苦しい時を越えて、挑戦する意味を知る

Q4 これまでの活動の中で、特に印象に残っている出来事は何ですか。

大きく二つあります。一つは、子どもたちの言葉です。僕は以前から「夢があるから頑張れる」と考え、仲間と子どもたちの夢を後押しする事業を立ち上げたり、学校で「夢先生」という授業を行ったりしてきました。トップアスリートと一緒に体を動かし、その凄さを体感してもらいながら、夢を持つことの大切さや、夢があるから頑張れるということを、自らの経験を踏まえて小学5、6年生に伝えてもらう取り組みです。ところが、コロナ禍に学校へ入り、子どもたちと話した時、「無理」「できない」「どうせ無理でしょう」という言葉を聞く機会が非常に増えました。子どもたちの夢を本気で後押しできる町をつくりたいと思って活動してきただけに、直接その言葉を聞いた時は本当にショックでした。コロナ禍が、子どもたちの心にこれほどまでネガティブな影響を与えていたのかと、悔しく、寂しい気持ちになりました。もう一つは、県議会議員になってから訪れた、アメリカのテキサス州オースティンやシリコンバレーでの経験です。現地では、投資家や資本家が若者やスタートアップ企業を応援し、可能性のある人や事業に対して民間から資金を出し、何度でも挑戦する機会をつくっていました。一方で、行政主導の部分が大きい愛知のスタートアップとの違いも感じました。一度失敗したからといって、そこで終わるのではなく、失敗を重ねながら成功へ近づいていく。何度でも挑戦できる環境があることは、とても大きな違いだと感じました。Google Cloudの本社を訪れた経験も印象的でした。社員が働きやすい環境が整えられている一方で、一人ひとりが「自分は何者になりたいのか」という思いを持ち、自ら目標へ向かって働いていました。休める環境があるから働かなくなるのではなく、自分が目指すものがあるから自発的に頑張る。その姿にも大きな衝撃を受けました。子どもたちが夢を持てること。そして、失敗しても何度でもやり直せること。この二つの経験は、今の僕が目指している「夢を持てる環境」「何度でも挑戦できる社会」という考えにつながっています。

Q5 議員として政治の力を実感した取り組みや、県議会で感じたことを教えてください。

自分の力だけではどうにもできない問題を抱えている方に寄り添い、これまで行政が目を向けてこなかった課題を政策につなげられた時に、議員になって良かったと感じます。一つの例が、「副次的な籍」という仕組みです。ある方から、障がいのある子どもが、自分の住んでいる地域の学校へ通いたいと希望したものの、学校から受け入れを断られたという相談を受けました。僕は、地域に住む子どもが地域の学校へ行きたいと言っているのに、なぜ断られなければならないのかと強く感じました。そこで、特別支援学校へ通う子どもにも、地域の学校にもう一つの席があるという考え方を県へ提案しました。地域の学校にもその子の籍があることを前提にすれば、学校側も「この子が来た時、どのように受け入れるのか」を考え、準備するようになります。子どもたちは学校の中だけで生活しているわけではありません。地域の道を歩き、買い物をし、同じ地域の人たちと暮らしています。同世代の子どもたちと知り合い、地域の中で声をかけ合える関係をつくることも大切です。そうした考え方が県で形になった時は、議員として取り組んできて良かったと感じました。市議会議員から県議会議員になった時には、「発言すること」に対する考え方も大きく変わりました。県議会では、経験のある議員ほど積極的に発言します。地域や業界団体など、多くの人たちの声を背負って議会へ来ているからです。発言しなければ、「何も考えていない」「何も求めていない」と受け取られてしまう可能性がある。一方で、いい加減な内容を話せば、次の機会を失うことにもつながります。だからこそ、皆さん本当によく勉強しています。現場の生の声を聞き、それを議会で代弁する。声を上げ、議論し、政策へつなげる。それが議員の役割なのだと、県議会に入って改めて感じました。



> 人の声を受け取り、ともかく動く

Q6 議員活動で大切にしている信念とご自身の強みは何ですか。

大切にしていることは、まず「人と会うこと」です。政治活動の基本は、どれだけ多くの人の意見や想いに触れられるかだと思っています。雨の日や雪の日、正直、気持ちが乗らない日もあります。それでも、人と会って話を聞くことを大切にしています。秘書になった時、県議会議員の先生から、「人と会うことを面倒だと思うようになったら、政治の仕事をやめる時だ」と教えられました。僕自身も、本当にその通りだと思っています。もう一つ大切にしているのが、「ともかく動くこと」です。

僕は「知覚動考」という言葉を大切にしていて、「ともかく動こう」と表現しています。物事を知り、覚え、よく考えてから動くのではなく、まず動く。動くから課題が見え、課題が見えるから、また次の行動につながります。動いていく過程で仲間もできます。そこで見つかった課題を改善し、また動く。そのトライアンドエラーを繰り返すことが大切だと思っています。地域の方と接する時も、できるだけ同じ目線に立ち、一緒に活動する側でいたいと思っています。僕は、「ファンをつくる」という表現があまり好きではありません。僕がつくりたいのは、ファンではなく仲間です。「先生」と呼ばれるよりも、「たかはる」「たかはる君」と呼ばれる方がうれしいですね。公園の草刈りや管理、田んぼや畑での作業、障がいのある方のサッカー教室などにも実際に足を運び、一緒に体を動かします。そうした中で交わされる何気ない言葉や、現場に行かなければ分からない小さな課題を受け取る。それが僕にとっての地域の声の集め方です。そうした活動を続ける中で、自分の強みを挙げるなら、圧倒的な活動量だと思います。「こうしたらいいよね」という話が出ると、「では、やろう」とすぐ動いてしまう。周りからすると迷惑なこともあるかもしれません。いつも夢の話をするので、仲間から冗談で「夢ハラ」と言われることもあります。それでも、夢があるから頑張れる。動くから課題が見つかる。課題を直して、また動く。その繰り返しで動き続けていることが、自分らしさだと思っています。

Q7 現在の愛知県にはどのような課題があり、これから何に力を入れていきたいですか。

愛知県は、ものづくり、特に自動車産業の発展によって成長してきた地域です。一方で、自動車産業は今、100年に一度ともいわれる構造変革の時期を迎えています。これまで愛知を支えてきたものづくりの形が変わる中で、次にどのような産業を育てていくのかを考えなければなりません。今あるものを守ることだけに固執するのではなく、新しいものに挑戦し、大きく変えていく姿勢も必要です。人口減少、高齢化、防災、インフラの老朽化など、課題は数多くあります。食や地域の基盤に関わる部分でも、足元から変化が起きています。愛知県には、日本を引っ張っていく力があります。だからこそ、変化を恐れず、大きな挑戦をしていく必要があると思っています。命を守るインフラ整備は大前提ですが、その上で、特に力を入れているのが福祉と産業振興です。自分の力だけではどうにもできない状況にある方を支えることは、行政や政治が当然取り組むべきことです。ただ、「福祉」「弱者救済」という特別なものとして分けるのではなく、困っている人がいれば当たり前に助ける、支える、肩を貸す。そういう感覚を地域の中になじませていきたいと思っています。産業では、特にスタートアップの推進に関心を持っています。自動車産業の構造転換が進む中で、新しい企業や産業が挑戦できる環境をつくる。スタートアップが育てば、地域全体にチャレンジする土壌が広がっていきます。リニアや航空宇宙産業なども、これからの成長を考える上で応援していきたい分野です。一方で、こうした政策を進めていく上では、政治ならではの難しさもあります。全員が100点だと思える政策は、なかなかありません。ある人にとっては「助かった」「前に進んだ」と思える政策でも、別の立場から見ると「なぜ、そのようなことをするのか」と感じる場合があります。だからこそ、多くの人に会い、話を聞き、自分自身も勉強しながら、異なる立場や考え方があることを理解した上で判断しなければならない。その難しさと向き合いながら、前へ進めていくのが政治の仕事だと思っています。

Q8 AIが広がるこれからの時代に、大切にしたいものは何ですか。

最近、エジプトに住んでいる知人の写真家が開いた個展を見て、改めて考えさせられたことがあります。そこで問われていたのは、「自分たちが言葉で大切だと言っていることと、実際の社会の動きや、自分自身の行動は、どれほど一致しているのか」ということでした。例えば、「人を見た目で判断してはいけない」と言いながら、実際には怖そうな人を見ると声をかけにくいと感じることがあります。「言語化」や「可視化」が重視される一方で、感覚や目に見えないものの大切さも、僕たちは知っています。そうした日常の中にあるズレや違和感を写真から問いかけられ、改めて、人としてどうあるべきなのかを考えました。AIが台頭してくる時代だからこそ、人としての価値観やコミュニケーション、人との距離感、助け合いや支え合いといった、リアルなふれ合いがより大切になると思っています。足りないものがあれば、近所の人に「少し貸してもらえませんか」と言える。人手が必要な時には自然に助け合える。そういう関係を残していきたい。これから社会はさらにグローバルになり、地域や国の境目も変わっていくと思います。AIがテレビのアナウンサーを務めたり、記事を書いたりする時代になり、人とAIとの境目も曖昧になっていく。だからこそ、「自分はこういう人間だ」「自分たちは、こういう価値観を大切にしている」と胸を張って言えるものを持つことが大切です。「人としてどうあるのか」「日本人とは何なのか」「日本の価値観とは何なのか」。日本人として受け継いできた感覚や、人と人とが助け合う関係、自分たちらしさを、これからの活動の中でも大切にしていきたいと思っています。

Q9 10年後、愛知県をどのような地域にしたいですか。また、次の世代へ伝えたいことも教えてください。

何度でも挑戦できる地域になっていてほしいです。誰もが夢を持ち、失敗しても、もう一度チャレンジできる。そして、挑戦する人を周りが支える。そんな愛知県になればいいと思っています。そのために大切なのが、コミュニケーションです。きちんと説明し、対話を重ねることで、「そういう理由なら理解できる」「それなら自分たちにもできる」と、新しいつながりや行動が生まれます。その積み重ねが、挑戦できる地域につながっていくと思います。若い世代には、「自分たち次第で、何でもつくっていける」ということを知ってほしいです。今、当たり前にあるものも、最初から当たり前だったわけではありません。今ある価値観を絶対だと思わず、自分たちで新しいものをつくっていってほしい。僕は、未来は明るいと信じています。愛知県のものづくりも、何度も挑戦し、失敗と改善を繰り返しながら発展してきました。一度でうまくいかなくてもいい。何度でもチャレンジし、少しずつ成功へ近づいていく。夢を持って進んでいこう。僕は、次の世代にそう伝えていきたいです。

Bizrea

COMPANY OVERVIEW

愛知県議会議員

「無いなら、自分たちでつくる」
愛知県議会議員・伊藤貴治とは?

愛知県議会議員として、建設委員会や子ども・子育て対策特別委員会に所属。地域の声に耳を傾け、子どもたちの夢や成長を支えるまちづくりを推進。夢のバトンを子どもたちにつなぐことで、地域全体の子育て・教育環境の向上に取り組んでいる。また、学校からの相談をきっかけに、仲間とともに「ドリームキッチン」を立ち上げ、子どもたちが安心して食事できる環境を提供。地域の大人や子ども同士のつながりを育むことも目指している。



役職名	愛知県議会議員
事務所名	伊藤たかはる事務所
代表者	伊藤 貴治
所在地	〒486-0844 春日井市鳥居松町4-168 春日ビル2階
連絡先	itotakaharutomonokai@gmail.com

CHECK THE DETAILS!



言葉には、会社を動かす力がある。

会社には、それぞれの物語があります。創業した理由。仕事を続けてきた中での葛藤や決断。社員やお客様に対する想い。そして、これから実現したい未来。けれど、その大切な想いほど、日々の仕事の中ではなかなか言葉にする機会がありません。私たち株式会社Bizreaは、経営者や働く人の中にある想いを丁寧に掘り起こし、言葉として届けることで、会社と人との新しい出会いを生み出したいと考えています。一つの言葉が、採用につながる。新しい仕事につながる。会社の信頼やブランドにつながっていく。Bizreaは、単に会社を紹介するためのメディアではありません。その会社らしさを伝え、未来の出会いをつくるためのメディアです。この一冊をきっかけに、人と人、会社と会社、そして新しい可能性がつながっていくことを願っています。

法人概要

法人名	株式会社Bizreaメディア
代表者	笠本 政満
本社所在地	愛知県春日井市如意申町7丁目15-5 アーバンハイツ春日井302号
電話番号	0568-50-2773
メールアドレス	bizrea@jp-sing.com



Bizrea

代表者インタビューマガジン
by 株式会社Bizreaメディア
bizrea@jp-sing.com

社長の言葉が、企業の未来をつくる。

地域企業の経営者が持つ想いを引き出し、
採用・営業・ブランディングにつながる言葉へ。

掲載・取材の
ご相談はこちら